

葦津珍彦 あしづ ちんげん 評論家。明治四十二年七月十七日福岡縣生れ、平成四年八月十日歿（一九九一―九二）。筆名珍、白旗十郎、葦津、葦津生。福岡高等商業學校中退。戦時中東條政権を批判して検閲せられる。戦後神社本廳の設立に参加、また神社新報社主筆として「神道護持」専心、神社界の指導的役割を果たした。

著書 『神武天皇紀元論―紀元節の正しき見方』（合著・日本文化研究会編、昭和二十二年二月二十一日花書房）、『大アジア主義と頭山滿』（昭和四十年四月二十五日日本教文社「日本人のための国史」増補版・四十七年七月二十日日本教文社）、『ロシア革命史話』（昭和四十二年九月新勢力社）、『大楠公』（深田與重郎合著・吉田智朗編、昭和四十二年四月一日兵庫・淡川神社社務所）、『武士道―戦闘者の精神』（昭和四十四年五月十五日徳間書店）、林房雄対談集『日本の原点』（合著、昭和四十七年四月十五日日本教文社）、『みやび』と覇権（類纂大皇論）』（神社新報社編、昭和五十五年一月十一日日本教文社）等。葦津珍彦先生追悼録編集委員会編『葦津珍彦先生追悼録』（平成五年十二月二十五日小日本社）刊。

武士道

戦闘者の精神

武士道

戦闘者の精神

葦津珍彦

戦いに生き、死んだ武士をささえた精神は、何であったのか。戦国乱世から昭和維新にまでいたる戦闘者の行動と思想に肉薄し、新しき騒乱の時代に「夫存をかける思想」を問う。

武士道「戦闘者の精神」 葦津珍彦 徳間書店 ● 690円

生死をかける
思想とは何か